

2007年3月4日 受難節第2主日礼拝

『イスラエルの希望』

(イザヤ 42 章 8～13 節、使徒言行録 28 章 17～24 節)

長かった、パウロの船旅も遂に終わりました。暴風、難破、マルタ島で毒蛇に咬まれるなど、幾たびかの危険に遭いました。しかし、パウロとその一行はあらゆる危険から守られて、遂に目的地のローマに着いたのです。パウロが、ローマに着いたとき幾人かの兄弟達、クリスチャンが出迎えてくれました。それで、パウロがローマに行く前に福音が伝えられ教会は建てられていたのです。パウロは、この兄弟達を見て神に感謝し、勇気づけられました(15 節)。パウロは、番兵を一人付けられましたが、一人で住むことが許されました。それから、三日がたちました。パウロは、ユダヤ人の重だつた人々を招待しました。熱心なファリサイ人だったパウロも、ローマのユダヤ人達とはまだ会った事はありません。パウロは、ローマ在住の同胞のユダヤ人達を招待し、彼らが集まって来た時、パウロはこう切り出しました。「兄弟たち、わたしは民に対しても先祖の慣習に対しても、背くようなことは何一つしていないのに、エルサレムで囚人として引き渡されてしまいました」。パウロは、何故自分がローマに来ることになったのか。そのあらましを語りました。パウロは、エルサレムの教会に献金を届ける為に来ていました(24 章 17)。神殿で、ユダヤ人たちに見つかって捕まえられました。このままでは、ユダヤ人たちの手でリンチされパウロは殺されてしまうところでした。ステファノの時のように。しかし、騒ぎを聞きつけた千人隊長によってパウロは保護され牢に拘留されました。その時から、パウロはずっと囚われの身となっていたのです。最初のうちは、パウロが騒ぎを起した張本人であるかの様に扱われました。ユダヤ人達が、パウロのことをあれこれ訴えたからです。しかし、取り調べが進むと事情はどうも違っていたのです。総督フェリクス、その後任者の総督フェストゥスが次々とパウロの件を調べました。そうして、よく調べたところパウロには死刑に当たるような罪状は見つからなかったのです。フェリクス、フェストゥスと二人のローマ総督は、ユダヤ人たちが、パウロについて言いがかりをつけていると解ったのです。アグリッパ王も二人と同じ意見でした。パウロは、死に値する様なことは、何もありません。ですから、本当ならパウロは釈放されるべきだったのです。いみじくもアグリッパ王が言っています。「あの男は皇帝に上訴さえしていなければ、釈放してもらえただろうに」(26 章 32)。パウロは、言います。「ローマ人は、わたしを取り調べたのですが、死刑に相当する理由が何もなくだったので、釈放しようと思ったのです。しかし、ユダヤ人たちが反対したので」(18～19 節)パウロは、皇帝に上訴をするしかなかったとのことです。

パウロは、いたずらに同胞を訴えたり非難したりする気持ちは少しもありません。「だからこそ、お会いして話し合いたいと、あなたがたにお願いしたのです。イスラエルが希望していることのために、わたしはこのように鎖でつながれているのです」(20 節)。どんな答えが返って来るかと思いました。これまでのユダヤ人たちのようにパウロを責めてく

るかと思われました。しかし、ローマのユダヤ人達は以外にもパウロにこう告げました。「私どもは、あなたのことについてユダヤから何の書面も受け取ってはおりませんし、またここに来た兄弟のだれ一人として、あなたについて何か悪いことを報告したことも、話したこともありませんでした。わたしたちには、あなたを非難するつもりはないと言わぬばかりです。エルサレムのユダヤ人達が、ローマの同胞に何も知らせていなかったというのs意外です。エルサレムのユダヤ人たちは、ローマに住むユダヤ人など、全く無視していたのでしょうか。異教の都に住むユダヤ人など異邦人と同じだと思い無視していたのかもしれませんが。エルサレムのユダヤ人たちがローマの同胞とあまり交わりをしようとしなかったのだとすると。もしかすると、ローマのユダヤ人たちは、パウロがエルサレムの人なのに、自分たちを呼んでくれて喜んでいたのかもしれませんが。単純に、遠くからはるばるやって来た同胞として歓迎しているかの様です。パウロとエルサレムのユダヤ人の間に何があったのか。その事件について、それ以上質問もしませんでした。それより、もっと聞きたいことがあったのです。「あなたの考えておられることを、直接お聞きしたい。この分派については、至る所で反対がある事を耳にしている情報のです。分派とはキリスト教のことです。当時、キリスト教はユダヤ教の一分派だと思われていました。パウロが、ローマに着いたとき出迎えてくれた兄弟たちがその証拠です。既に、キリスト教がローマに伝わっていたのです。キリスト教については、至るところで反対があると、ローマのユダヤ人たちが言っています。イエスさまが伝道なさった時にも悪口を言う人がありました。そしてパウロの時代にも、キリスト教について悪い噂が流れていたというのです。しかし、人からの風聞だけでは、当てになりませんから。直接、パウロからキリスト教について聞かせてほしいというのです。パウロは、囚われの身ですから自分から会堂に出かけて行くことは出来ません。にも拘わらず、パウロに、機会が与えられたのです。イスラエルが希望して来たメシアを証する機会がこのように備えられていました。

こうして、相応しい日が決められました。今度は、主だったユダヤ人ばかりでなく一般の人も含めてローマに住む沢山のユダヤ人がパウロのところに出かけて来たのです。パウロの話したのは、自分が伝道した体験や今おかれた苦しい状況のことではありません。福音の事でした。朝から晩まで説明を続けました。神の国について、モーセ律法や預言者を引用して、イエスさまが、復活されて弟子たちの前に現れた時にも同じことをなさっています。エマオに向かう弟子にモーセと預言者から始めて、聖書全体にわたり御自分について書かれた事を説明された(ルカ 24 章 27)。その後、弟子たちに現れてこのように言っています「『メシアは苦しみを受け、三日目に死人の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と(ルカ 24 章 47)。イエスさまが、わたしたちの罪を背負う為に十字架に掛かり執り成しをしてくださった。誰であろうと、イエス・キリストを信じる者は、罪を赦していただける。イエスのゆえに復活の命が約束されているということです。それが、イスラエルが希望して来た救いです。パウロは、忠実なイスラエル神の民としてこのことを証し続けました。そのために鎖につ

ながれているのです。例えパウロは、鎖につながれていても福音はつながれていません。この時も沢山の人が福音を聞くことになりました。

福音を聞いた人々は、ある者は心を開き、パウロ語るイエス・キリストの福音を受け入れました。しかし、他の人達は、頑なに信じようとはしなかったのです。十字架に掛かけられた方をメシアだとは信じらなかったのです。こうして、ローマのユダヤ人たちは二つに分けられてしまいました。一方は、イエス・キリストにつながるものとされ、他方は神とメシアイエスに背を向けることになったのです。わたしたち自身は、どうでしょうか。一体教会に何を望んでいるのでしょうか。福音を聞きそれに自分自身が聞き従うことでしょうか。それとも、他に何かを期待しているのでしょうか。キリストの以外の誰かに心を寄せているのでしょうか。人の心を見通す神様は、全てご存じです。わたしたちの救い主は唯一人、イエス・キリストです。この方にのみ唯一の望みをおく人々、それこそがまことの神の民イスラエルです。これからも、まことのイスラエルとして主と共に歩みましょう。

[説教者：堀地敦子牧師]